

# 陳述副詞「きっと」「必ず」の 意味と習得に関する研究 — 認知言語学的観点から —

王 冲

## 1. はじめに

副詞習得の難しさは、これまでも多くの先行研究で「日常会話ではさほど不自由しない中上級学習者でも、副詞があまり習得されていない」と指摘されてきた。また、大関（1993）は副詞の持つ性格が極めて複雑なものであるし、特に話し手の心的態度として捉えられる陳述的側面に対する客観的記述が難しく、使用上様々な制限を有するものが多いため、指導が困難であると述べている。そこで、本研究は日中両言語対照分析、第二言語習得、認知言語学という三つのアプローチを採用し、多様な用法をもち、類義語である陳述副詞「きっと」と「必ず」について、両語の意味構造と習得プロセスとの関係とを解明する。そして、それらの結果を踏まえて陳述副詞の有効な指導法を探る。

## 2. 「きっと」「必ず」の意味構造及びその特徴

日本語の陳述副詞「きっと」「必ず」はともに「推量」「意志」「依頼」「確率」の用法をもっている。本研究では、認知言語学の知見を参考に、「きっと」「必ず」の意味構造を分析した。以下のような結果を得た。

①「きっと」のスキーマは「事柄が成立することへの話し手の強い思い」であり、「必ず」のスキーマは「事柄がほぼ 100% の確率で実現するという話し手の主観的な態度」である。

②「きっと」と「必ず」は「推量」用法から「非推量」用法へと一方向的ではなく多方向的に派生していくのがわかる。さらに、共時的に放射状に連鎖していき、その際類似性が確認される。その類似性から「きっと」と「必ず」は「推量」用法と「非推量」用法の間の拡張関係も見られる。

③史的観点からみると、実際に使用されるとき、「きっと」は「推量」用法を分担しているのに対し、

「必ず」は「意志」「依頼」「確率」用法を分担しているという職能分化も見られる。

④「きっと」「必ず」は文脈への高い依存性が見え、スキーマより各用法のほうが際立っていることから漠然性があると窺える。いわゆるこのような多様な用法をもつ陳述副詞「きっと」「必ず」は一見して多義のように思われるが、それは文末表現との共起関係にあり、文末表現の多様性ゆえそれに引きつられるように多義的に見えるだけであって、実は非多義である可能性もある。

このことはモダリティに関わる言語表現の意味拡張としては、黒滝（2003）で述べている「日本語のモダリティでは、epistemic modality がプロトタイプであり、deontic modality は epistemic modality から拡張された非プロトタイプである。また日本語モダリティコンテクストへの高い依存性があり、単義である。」を大筋に支持する結果となっている。

なお、「きっと」と「必ず」の各用法の異同については、以下の通りである。

### 【推量用法】

「必ず」の推量用法は「話し手の非現実的な事柄がほぼ 100% 実現することへの確信」を表す。したがって、「必ず」は「きっと」より客観的な根拠に基づく話し手の確信を表す。よって市川（2000）では以下の文は誤用と指摘している。

\*1 温泉水が透明ならきっと（→必ず）晴れると温泉旅館の主人が言った。（市川 2000）

また、「必ず」は否定、過去、状態など「事柄の実現」を表せない文脈には用いられない。「きっと」は文脈を与えていれば、こういったような制限がない。よって、以下の文には「必ず」を用いることができない。

\*2 明日テストがあるから、彼は必ず（→きっと）早く寝たと思います。

\*3 今日土曜日だから、彼は必ず（→絶対に）家にいない。

\*4 あの人によく運動する人だから、必ず（→きっと）大丈夫でしょう。

#### 【意志用法】

「意志」用法では、「必ず」は「事柄がほぼ100%の確率で実現するという話し手の主観的な態度」を表すため、話し手の強い責任を感じるのに対し、「きっと」は「話し手の自分自身にかかわる事柄が成立することへの確信」を表す。したがって、強い責任までは感じない。よって以下の文では「必ず」しか用いられない。

\*5 もし私が中国の大統領だったら、きっと（→必ず）支配階級にはびこっている官僚主義を徹底的に撲滅する。（市川 2000）

#### 【依頼用法】

「依頼」用法に関しては、「必ず」には、聞き手がそうする義務を負っている意図を感じるのに対し、「きっと」には、聞き手に対する信頼、お願いの気持ちを感じる。よって市川 2000 は以下の文は誤用と指摘している。

\*6 来ないのなら、きっと（→必ず）先生に話してください。（市川 2000）

#### 【確率用法】

「確率」用法の「きっと」はだんだん使われなくなってきた。よって関口他（2005）は以下の文は誤用と指摘している。

\*7 暇になると、私はきっと（→必ず）この店へ食べに行きます。（関口他 2005）

#### 【義務用法】

「きっと」には義務用法がない。よって以下の文には「きっと」を用いることができない。

\*8 テストのためじゃなく、宿題はきっと（→必ず）やる習慣を持たなければなりません。（市川 2000）

### 3. 中国語の「一定」と日本語の「きっと」「必ず」の比較

一方、日本語の「きっと」「必ず」に相当する中国語の「一定」にも「推量」「意志」「依頼」用法があるという。しかし、日本語の「きっと」「必ず」と中国語の「一定」の意味の違いは単にそれぞれの単語の意味範囲が一致しないということにとどまらなく、語彙の構造そのものが大きく異なることがわ

かる。日本語の「きっと」「必ず」は「推量」用法はプロトタイプとして、非推量用法へ拡張しているのに対し、中国語の「一定」は「非推量」用法はプロトタイプ用法として「推量」用法へと拡張していることがわかる。また、日本語母語話者において「きっと」の推量用法はよく使われているのに対し、「必ず」は「意志」「依頼」用法がよく使われている。このように、日本語の「推量」用法と「非推量」用法はそれぞれ「きっと」「必ず」という二語で分担しているが、中国語の場合すべて「一定」という一つの言葉で分担している。つまり、「一定」の「推量」用法は日本語の「きっと」に相当し、「一定」の「非推量」用法（「意志」「依頼」用法）は日本語の「必ず」に相当する。しかし、これは一々対応するわけではなく、中国語の「一定」は日本語の「きっと」「必ず」より使用範囲が広く、制限も少ないこともわかる。

こうした日中両言語の概念<sup>1</sup>及び認知体系の違いによって、中国人日本語学習者のもっている「きっと」「必ず」の意味知識は日本語母語話者の意味知識と大きな相違があることが明らかになった。

### 4. 中国人日本語学習者の「きっと」「必ず」の習得状況

本研究では、まず「自由産出法」を通じて中国人日本語学習者のもつ「きっと」「必ず」の意味知識を明らかにした。「きっと」「必ず」について「意志」「依頼」用法を多く使用している。これは母語である中国語の「一定」の影響を受けていると窺えた。日本語の「きっと」「必ず」に相当する中国語は「一定」であるが、厳密に言うところでは「スキーマ」が似ているだけに過ぎない。その似ている「スキーマ」は具体化され、それぞれ「きっと」と「一定」の「推量」用法と「意志」用法になるが、どの用法が慣習的に活性化されやすいのかには大きな違いがある。日本語の「きっと」の場合、「推量」用法が活性化されやすく、プロトタイプになり、一方中国語の「一定」の場合、「意志」用法が活性化されやすく、プロトタイプとして定着している。その結果、似た「スキーマ」でも、その人が持っている母語により活性化され用いられるプロトタイプの違いが生じる。学習者は母語中国語の「一定」のプロトタイプの転移を受けて、日本語の「きっと」「必ず」を多く使用しているだろう。また、日本語の

「きっと」と「必ず」は役割分担をしており、「必ず」の場合、「意志」「依頼」用法がよく使われているのに対し、「きっと」の場合、「推量」用法がよく使われている。このことから学習者は母語のプロトタイプの転移を受けて、「きっと」の「意志」用法の習得が遅れているからではないだろうか。さらに、学習者の「必ず」の中間言語においては「推量」用法と「確率」用法には化石化、逆戻り現象<sup>2</sup>が見られた。中国語の「一定」には「推量」用法があり、「確率」用法がないため、学習者は「推量」用法の使用割合が多くなり、「確率」用法の使用割合が少なくなるのではないだろうか。

このように学習者の「きっと」「必ず」の意味知識は、母語の「正の転移」も「負の転移」も原因になっているものがあると考えられる。しかしこうした中間言語が形成されている原因はすべて母語の転移だけに帰されてもいいものなのだろうか。また、学習者の「必ず」の中間言語の発達において化石化、逆戻り現象が見られるのが母語の転移で説明できるであろうか。森山（2002）などによれば、習得には、「認知→母語→目標言語」と、母語を経ずに「認知→目標言語」という二つのプロセスがある。最初のプロセスは習得の初期段階で用いられ、次のプロセスは習得レベルが上がった段階で用いられることが分かっている。最初のプロセスにおいては、母語から目標言語への言語的な変換過程であるため、両言語の違いを考慮すれば、母語の転移で起こされている誤用を減らすことができる。しかし、次のプロセスに入ると、両言語間の変換ではなく、認知体系がそのまま第二言語の表出に用いられており、もし母語の認知的な意味構造がそのまま用いられてしまえば、それがそのまま目標言語に変換されることになる。これこそが、上級になって、「必ず」の「推量」「確率」用法では化石化、逆戻り現象が発生した原因と考えられる。

本研究ではまた学習者は「きっと」「必ず」の二語の使い分けをどのように理解しているかを「文の受容」の観点から探った。言葉の習得においては、その語の意味用法が正しく習得されているかどうかのみならず、その語の使用範囲（意味の可能域）を正しく把握できているかどうかも重要である。日本人母語話者が「きっと」「必ず」の使用範囲、いわゆる二語の役割分担が適切に設定できているのは、その判断基準となる認知体系を、その語の長い使用

経験によって内在化しているからである。そうすると、学習者も習得する際、これらの語の使用上の抛り所となる認知体系を内在化することが不可欠なことになる。

つまり、第二言語習得にあたっては、新しい言語体系と共に新しい認知的体系を習得しなければならないということになる。しかし、学習者は知らず知らずのうちに母語の転移を受けている。それはたとえ浴びるように目標言語を聞いたとしても無意識のうちに働いていて、母語のルールにないものや合わないものは自然と排除してしまうということである。中国人日本語学習者が「きっと」「必ず」の意味を正しく理解していないことの原因は、無意識に「きっと」「必ず」と「一定」がまったく同じ意味であるという想定のもとに使用していることが示されたのである。つまり、学習者は「一定」から「きっと」あるいは「必ず」への「概念変化」を起こすことができなかった。このような「概念変化」を起こさないと、目標言語の新しい認知的体系も習得できずに、「認知→目標言語」という習得プロセスに入ってしまうと、母語の認知体系を用いて変換が行われ、その結果、「きっと」の意志用法が多く使われ、「必ず」の「推量」「確率」用法は化石化、逆戻り現象などを起こしてしまうだろう。このような中間言語発達における遅れ、化石化、逆戻り現象を防ぐには、学習の最初の段階から、「きっと」「必ず」という言葉の背景にあるそれぞれの認知体系、言い換えると「きっと」「必ず」のそれぞれの認知的な意味構造を習得させなければならない。これを習得することによってこそ「概念変化」を起こしうる。

##### 5. 陳述副詞「きっと」「必ず」の指導への示唆

中国人日本語学習者の「きっと」「必ず」の習得を支援するため、本研究では、学習者がよく使用している教科書、辞典における「きっと」「必ず」の説明を挙げて、問題点を指摘した上で、インタビュー調査を通じて中国の大学日本語教育における「きっと」「必ず」の指導の実態を明らかにした。教科書、辞典の説明及び教師の指導では、学習者は「きっと」「必ず」の「概念変化」「認知変換」を行うのが難しいと考えられる。

中国語母語話者が第二言語として日本語を習得するにあたっては、これまで母語の「一定」の概念

及び認知体系を日本語の「きっと」「必ず」を変えなければならない。このことが遅れてしまうと、学習者がもっている「きっと」「必ず」の意味知識は化石化あるいは逆戻りを引き起こすこととなる。これを防ぐには、学習の最初の段階から、日本語の「きっと」「必ず」と中国語の「一定」の概念、認知体系における異同を明示的に示し、化石化を引き起こす前に概念変化、認知変換を導いてあげる必要がある。また、認知言語学的な考え方はボトムアップである。つまり、母語話者は、生活経験、具体的な用例に触れるの中からボトムアップ的にスキーマを獲得している。したがって、「きっと」「必ず」の習得にあたって、「きっと」「必ず」の様々な言語的事例に触れることがまず最も大事なことであろう。具体的に言うと、「きっと」「必ず」の指導において、

①「きっと」「必ず」の具体的な例文を示した上、文脈を理解させること

②「きっと」「必ず」の意味構造を説明すること

③母語中国語の「一定」との概念、認知体系の違いを明示すること

などに注意すべきであると思われる。

## 6. 今後の課題

最後に今後の課題について論じてみたい。

第一に、本研究は「きっと」「必ず」を事例としているが、陳述副詞の意味の習得の手立てとするためには、「たぶん」「ぜひ」「絶対に」などの陳述副詞間の関連付け及び習得状況を分析しなければならない。

第二に、本研究は認知言語学的観点から意味分析、対照研究、習得研究を行った。このような研究方法が有効な陳述副詞の範囲、学習者のレベル、学

習環境などに関する検討も必要である。

第三に、本研究で提示した指導法の学習効果、また学習のどの段階で行うのが最も有効であるかなどについてさらに追跡調査が必要である。

これらの点を今後の課題として、学習者の陳述副詞、及び多様な用法をもつ副詞習得の一連の研究を重ねて行っていききたいと考えている。

## 注

1. ここでの概念は「きっと」「必ず」の各用法のことを指す。
2. 学習者の習得状況が、学習が進むに連れて母語話者の水準からむしろ遠ざかっていく現象のことをここでは逆戻り現象と呼ぶことにする。学習者の習得状況が、学習が進むに連れて母語話者の水準に近づいていくこともなく、遠ざかっていくこともなく、むしろ停滞している現象のことをここでは化石化と呼ぶ。

## 参考文献

- 中市川保子 (2000) 『続・日本語誤用例文小辞典 一接続詞・副詞一』凡人社
- 大関真理 (1993) 「日本語教育の視点からみた副詞」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊創刊号 1-14
- 黒滝真理子 (2003) 『Deontic→Epistemic の普遍性と相対性—モダリティの日英対照研究—』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻 博士学位論文
- 関口要・堀伸一郎・黄淑妙 (2005) 「台湾人日本語学習者作文データベースを利用した誤用分析—副詞の使用とその誤用傾向について—」2005 年日語教学国際会議 台湾の東呉大学日本語文学系主催
- 森山新 (2002) 「認知的観点から見た中間言語発達に関する実験的研究」『総合的日本語教育を求めて』146-168 国書刊行

おう ちゅう／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座

mychong1979a@yahoo.co.jp